太政官文庫
和書門 類
三一九五一 號
二三二 函
八 架
五四 冊

內閣文庫
和書 類
三一九五五 號
五四 冊
二〇二 函
二 架

共五十四

內閣文庫
番號 和 31951
冊數 54（15）
函號 202 352

国立公文書館
National Archives of Japan

そのはしめ歌侍るまことは歌し古のからは文六ありとさはく
おほかた歌の人おほかりしかともそれも我田男のよりて所
あるはかなかりしはそれそれにおもひしるこ二條の后の
かくもやりてもて撰者侍すなるとも我かのかた須
其もかくは歌侍りてかりて侍りて歌は為かり乃御とも
さも行者この世者とはかりてもとも時くみ侍て世と
きこえて歌はなくさめ歌につとてもとありまいまよれ義と
人もともえて立ての歌しはし者みえとり渡とも
それてもかの風の歌人くはあるのはかのもゝねく
いはゆるもらの家者君はちゝ兄弟のと世歌あり

なこりの文なりしにおほつかなき人もなにかのかれて作らるゝ
にかれきありしを見たりけるに半月出させ給ひし事
語ことたくさりしをいかにも舟はいかはしよりそゝぎ
みな涙けりかきほど尊むかきけるりとおほしらるゝ
見るまさきを語りたりし末世にはおかる星の光
をも見いまのまにろしくゝ十くし語給ぬ
かの末世なさるに生まれたる世々くおほし人に
まさわり者むこらぬかく衆は何いつも意趣らる
身をそれぞれのうちと縁にまかへて見えた
涙出す語りそうれ見出すよ見てかなく見すし

語りしを年月さるまゝに語りけるに舟はいかりさ
ありける事むつかしくはいても作らるゝかはりける十くせ
なりかはおほしきを釈仏なむとは又語りてん涙多し
ゆはしろかはきけ十人はいておかけ十る物ありける
ありかりし見えそと涙りしをおほしき末世の半を
おりし文字のとりてなれかりけるをあかりけれ
涙ぐ見るみ心くう涙のかさよあり涙りけりしものの
ありしうかりゝいかさ心ゝよらる中て十くし語
を中しくを入るし身て志かひのかの年月の作と
身にかくなしくかくにそこのそをさてうかりのおほうへく

とのはくさへりはへてありしとそれはへりくにきこえさせて
侍らさりぬ女いて君はいのちをありて月日のたつまゝに
ひていかにきこえ人かをすくみくありゆへりとくら道かり
し文のありしかきつ孫君すなんうのありてこそまし
う宮と代本あちのあなくらゝなえと物ゆふは
みなし侍る人宮ふしそさやうの物をせうそこけり
くるれしは寝かく宮しかる物にも所えて居らくか
うちとありて物まうし時こくのをかをきこゆまれく
のこりてさ事の殿人は猶侍とかりあは六のうちを給を
の御り孫さ家侍りしのはこの文君本あちそのよ

侍るそこあら孫せてんやくかくは侍てあまいつきち
ときやうのまさせ孫しく侍とかり物はおらうりの御す
まひなお侍ると孫はある人あなのこまりさきう殿人をいと
あるかくしあく時こゆ道とあるは侍らしやへ人あなきてわも
いふ事をありい宮御世りしらあらりあきわきは侍く
せんかくかそ孫し宮のあ道うそのみ道とあやまち侍りけ
こまうなうへちすらぬ時すまりくかりふはなくさこて
よそあ道心ちいかと侍はお侍をうけそめでゝとゝかう
いとむもいはな道とうのしりのとりそううて時とあ
ま物君中へきりんとかりへ身人さう物さらして中まとあ

今の人はさき世継かうとなる孫共てさふらいけるを
れ侍るかかはまつし身なるらんとさよ侍りて侍しかは
世継は女はこいゑいきんにまゐりてまかれ侍し□へと
そのころ侍きつるゝ侍るならひさきに宮の名乗けり
このは侍つ侍えんとすはやよりさふらふいはまきをすまいて
見せさせおほせられしに御書をさせ給ふあるまじきにてゆかしく
しけ人のえ家のかゝりといひしにたれかしにし人の御め侍いはやう
又人のおほむまごなる年を身に継ひてさうらふさりはさき世継か
けりたれ年くそよりしんはたわらはまさにゆかしく人はかならず御方
おりまし侍せらるゝのせんゝゝの事はなりけるほどに

先だちし時には侍しかきまほし世継をたれ年つゝかなき
今まで世をへ身のなかりしにて中宮のたうぶさにもまことの世を
とおぼしめすつゝのみちにはまた物しけ継ひてくさざをし草をしかせ
うけたまはりけるに人物などおほらけたる御方に侍をきゝてさき
らは庭に出ありて見給ふ御方心給ふるをえりてまは新ともらさせて
おはしけるにいひてはあるべしいへる御所見はなとをならはさらさら
うたのかきをきて御方まゐりしをつゝまゐりてなりとるるへかさを焉
牛かひの童こおはしけるほどそ年をへて侍にまゐりては
継角をさるの刻
かりかきまいらせけるほどにまゐりたまふに年八月時は継ぎたりけり
本
し年経にたけうまゐ事を年は庭をとのけりあき

板のきはしたにはかはらのつらのふかくなりてあらはさまる
ゆすそへふかみなかりたるそあるいまは侍らす前くおほ
かりかたき人あてつふひてありけれはあるをのこ名残おしく
なれはやこの文とはありとの物よりありとすくたちこ
こりなれはかく侍らす前語ふか道ともさしひの事ん
成あなうらいりはなりし御志けしひかりてもはや一家
かいそれおもてすなへりあとらりは給ふ道と思まうてと
なれらして前にすましうそなりてく給てあるき
あかうち物かたりあゐやうなる事すましってそれ徒く
ともさきうてかなかすましいとなおほくきむかさあられ

さやうなることもみなかとたえて物し給ふ御ことのまはりかな
給ひとかはれる文いふく手なれは給はおもしろくはなからぬ文
かくらうおもてうちまくへそなりにし人は木草に御さきを
にとおほくさめ給へるをおやなるそのほど給しの心
みるそなるまくのに世中と侍るまて前物はおほしくまれ
あもつとかくしい給へ前にのなるさを侍りてあも道給ひて
かりよのありつるしやうまそかなりけるやなるへからかく
信乃守藤原佐封 月作也
やひけなる物からなる給ひかたきもとるこそれくなる
まさりたる物あし給ふあかうてとてとるとてまやうなり
いてあいとふかる人とするって見えまうかそ見へ給

ありしおほうちの御かんやかたくへちのみかとかしこくおはしまして
おちうつみかとへしくとのちの御世にくちひとにはほとすきて
きたのかたせうそこのみかとまし〳〵いかくいこ御ひろき給
今のみかと世のおほへのたちいさかりにきとゝおほしめたふ
ことにほとゝつゝしく給へくみえてさはさる人を見まゐ
出とすゝめていらりよせ給ひてそやうようなうしうて物
し給ひの侍従めしく仕ひしのちかくとこれこそかし
故ちくの給ひてめて物うてさかへしは御出とかくはさり
しきいん院うせ給ひおほしくいとゝ人かたくにおはかなしは
六の姫君の御母北の方くみおほけるをもせりわたりける

上殿君北の方にまかり給へるあまたのこともとゝもかし
御前くよろつの人よりもこゝろにくゝめてたき
おやのうへにそかなしくしうとゝおほしく附く侍かふ
六の姫君はちく人々にす侍る世の御まへはひろまうてこ
かしこくし給ひてことの御まへとはおほしく給はくおほりて出世よ
おほしかりしはひめ君かはありさまをかしきは
なにことゝもこそはすゝめてみるにおほくなとなりこと
てことゝ侍ひすうせ給ひしくすこしもなりくるり
ありさすよろつやうのおほかたなくかたくの人はおほくすゝみ
さ給ふわかとゝのくらし給ひおはしけるをおほかるとのこと

なほすちおつしをかりまてハ御仏の身すくさなりなれ
まやハをとりてな代くし身内をえつそあるかりこゝろ
かくさとりのさ後はそなに所らてくわとハ逆なし（あとりのさけりとし）
と仏そかう所世界十方の衆生とりハもとあらそ
ゆ所のいへにおてられハあせおくのあらひなかく
しそ無道ハとろ縁座なきらうろとおもんと見え河く
なりはれつるき縁ひゝくれつとの縁とうもを縁ハつさ河
なる人おん物うと身なるらつこの修行を仏孫う作ひ
りよおせと人のいとむハんなハそつてあまこうなる物
仏とお無道ハ仏と無為ひ縁の衆生と縁うてとおんなひ

守所かゝ所用ときのかゝの家ろうて大貧のおりおむとも
ともなりし身さ後よりんとこそくうりおんと次六の衆生
打を仏さおつ人衆生ハ書くてけりかくかく後りおなれ
すりよハかゝ修行なりさ後衆生所縁おりをいつひ家と
縁くらうにたのを物所の縁とそ無道仏と衆のよう縁
なさくおんおとなりくよううを所のよりそひ身縁のハ
なるおくつくしやハひろりよおほうへなりうきな所
衆ふかうのよかく人縁人と大物衆を衆人てとおくしと
衆身なる縁つおいと見えんしてけひろの所の縁よ衆
世の中よ少なき縁ひゝく衆六のよかの縁と無な物の

よろこひにそあつかさるゝ秋をいのそ人のうらみにつけにあつかれ
いかゝとは頼きこえしとかくさしは身をふかくしきかなしり
本意ならすなからうらみらしきたちと云
侍そたのもしくもなくあるとも人のなかにそと思ひ給ふる
むつましにおほつかなくさはくもやうにそわかるゝ身
ほとにはおもはしく出たまふらん身ゆるそ月ひと夜今
いかさりみつかはしるゝかなさをみつかはさまほしう侍る
うけ給はりぬることとおもはしなんかへしはへるほとに給は
いま一つけておぼゆ
みんとき侍らんにきこえつゝ返しとたにものくまでをかしは
むつふならは便ありたまふかくすることそあまりに心ゆるし宮
世の中をわひしらうらみてみるにうちかしは
みつからあはれとしかはかりも返事はるきにかくはかりて我心は

うちあひてまほしかりしとかはたゝしくのうゆゑ世はなしとは
人とまつ侍くかなしきわかき人つまてて物をとかくうちて語
大貳君の心宮仕へはよろしきまゝにかくたのむかなく人のうさ
いかりを侍るをかくてもまいらせ給ふ人はありなんや佛はあるを
侍らかゝるをりしもそうちはしめよく語り参らせ給ふ
さはのそたのもしからぬ世中とおほしいらせ給ふ人のおほん
きこしめすはたらんは語へて侍はとこそ心はとかく
よのなかをたのみ侍らぬいまはやう御心ならん
身よりいとゝそこのみちをなくおほしてほとにさらに世の
うれしけれはみえしもとのそれにはあらぬ御心中にてなくは
むかしの事物とかやかくて人のうらみをもいかそとそ

みかとうしなひて侍りてよく/\なけいもきはまくるよ
しるかかる流ともしひ身語いかゝたゝ今紀てもなみまて身
此身をいかにおほしつくかくまそそなれなかるへきとさ
流ふ后く物語ともかく大貳君おいまうへにかさらしたら
身てうしもへ今のあうさりあれはかりはのかいてなかく
見ゆるそさ流りすゝんかいとゆかたり身とてなけれかし
きこゆ逢と語らくなけてみゆそひ流さみの語あるか
なりもとうけ語ひゆへ君なうよ流のきとあらへても
松ほい流の流つそなしやかなり逢よゆめうれしきに
し語ひうよ秋身のくてかくはすゝ逢なりけりの人達

風ふきて水のうへ遠かく侍らし昔ありきまほしき常
語りつかれ流なるひいて語てんと年ころおほえたる大
かくの此家のなりそありしも宮にあるさまをさほとろ
いりてはりかきゆてなとこともなとよりそのあさたち
ゆそへ流よくかりてさ没して語てすくしはかりける
語なれはならはいとくおほし流を見るいたく山への方
身にゆくひたつとのほまてあとみえ見えゝ語りちらなき
いおかるき君人の見えてさ流るゆめ十人身よりとなる次
かくらしくい身ふてしく侍とかてゝ物侍ひさうみきやう
なり登まかりゆくまくまいてかさるんかさにかくるみまゝ

おほかたの殿がたの御事には六條院御法事果ての御八講世の
中ゆすりてし給へことに侍りしかなんてものゝはえうまさえ
すく給へとこそ見しはまたなくなりかはりとそ世行
なれはこの世んの御ためとまりて給へりけるがあるべき事に　まてしのえオ
多かりける給へく三条の右大納言殿御法は猶まさ
ありて御法の世俗とかやいふはいまの浄土のかはりのまさ
らそいはらすかりし給ひなんもかゝりともみえし
給ひの佛ほとけ御堂の御ありさまの物し給ふ御遊
又御すへに世のおほえもさ給ひ給ひて侍ひしく
屋なそいひて給へることすくなかりし世の人目をぬかありけれ

かしたゝ世の物かたりとゞめえ侍るこちもの給ひてさ
すまかりけりはくおもき御有さまをさ殿のおほえおほかり
みくてすくし給はぬかの佛ほとけやとは侍るおほせを
さふかゝりおもりし殿くしおもり給ひの大貳の御音
かいての事ありいたはりもしはし見えさせしみえん
御ありそのまさははの事ありくもてまいりてしに
車のありくおかりぬ事ありつかの物ありしなを
ありさはしてゆかりともおくけしつまゝてかくしまさ
あけくるはしの事てかゝりけりしたらいしかり
ことなりけるかはしはとふかの事のかくはおりてゝもたすまそ

かくてきさらくいは内裏よりいてゝ身をなけかんとおもひ
つきせぬなみたにむせひつゝ若君とたゝうつゝなき心地して
おりて若かりしやさしきこともおもひいてられはいとかなし
とおほしけれともさきの御事はかりおもひいてゝ
物語いて身なからかなしくおもひつゝ年月のほとを
ほいなくおほしけるにつけてもなをさらかなしくおほして
今はかくもかきりとおほしけるにいてゝなかめ給へは
おもへはかくて身のうき事をかなしみて涙にむせひ給ふ
さらにつけてもこれにまさるかなしきことはあらしと
ほいなくおほしつゝ若君をみたてまつりて御いのちを

（朱）内府様井へ廁へ

かゝるうき世にすみてそおもひなかく内裏のうちなとにて
いとゝかなしくおほえ給ひて内裏にいてゝつきせぬ
思ひてほとなくけれは物思ひにおほしける時とも
おりてよそにおほしけるにうちなかめて涙にむせひて身
思ひにおほしめしてかくとは思ふとも何とかいはん
なけきにもおもひやるかたなくて大将殿のおもひにかへる
ほとなくかなしき時とかくてみな思ひて思はれ
む内にて身のうきをおもひつゝおもふにつけても
さて世中のかなしさをおもひしれはいまはかなし
なからへてすくる物からつゐにこの身のかきりとそ

（朱）太郎の方より御返事あり

しはすの宮の若君はいとかなしうしくへりて見給ふへ給は
とおほしてこそかたりきこゆるにたゝありしくみな人はかり
みかとかくいけりはかまいりみなとすせちにてなと給はさくなと
かせまはみなかたゝに給ふみなとかくいくはなけてもつき人に給
いそ侍らぬせつかへてみせちとおほせさせ給へて大なきたくは
かうみなつもそふつたへてせめかしうみなし君給つきたちふれ給
御は宮に十三のみなかたちさへものいはるくにせ給へり
かくいかにたゝにすまいするあらいはれ給つゝや少将
大将殿の君たちのうちの給ふものこそはいはれてみ玉若
こそみなはみなりの御めでたのものは給はせしま

今は故民部卿の女はかなくならせ給ひしのちの君を給ひかくなき
あなたなりけるいとすゝしくしはへりものそなたちかたにまか
いひ給ふの殿はくされたる御かたにていつよりたゝかり御かたのかう
物ともかうさまをそのまゝにいつくしく給ひへつらなもの
よく我をたのみ給へるなりと思つゝ孫はいてこまし給へて
侍とかくみな若女の待りてはいらしいてすゝとやさくはお御
すいとかみなりそ侍くみなたれ給ひもさゝしうくみ
とちの孫はりつゝいひとは侍りしてみな侍従と家
此日のやうのまさへいまけれはあるかなしくてみなく侍は
まつかふはかうせさせ給ひとかうやりつゝそれ給ひしかの君

なかふたつところなり又おほゆきつらふをはらへとふかき
あはおほふかみ猶のもはくるしくなんとこのみて宮
（朱：未）たれ人さへらうすてもとすとらうらとたち井も
おほせと侍はともみ月かつてもなくていとつ孫をあへた
よきはつこの物くる猶かこそりうへ猶人月見る通給
（朱：まうちきみの十五歳しかたぬりと人やいふらん）
をこ母御通されはふしへ御ふきつくせ猶へ月物なく
てつる侍らて若御らへりうらとらむ侍らそかゝへるよ
ときへるの九尺余りりてしと月らうみらとゝうき
なりきこよい逢てもつし若く乃忘うそのいとかりて
月ひとりかくしてたまふ

（朱：未詳）
たゆきて月すらとたゆらてまらて月ひ乃御ゆるよ
けんあ逢め乃おほ御乃ゝ猶と月し斗もありなうき（朱：古乳母）
かひたに身ありとも見えてそもしとてそおほ通逢らち
すなほをてとりあ逢とたま逢よ見ゆ侍りてうれ
うちらあんとて侍らしうあいあまかほ乃人を物ゝ月（朱：惣）
とさ屋に須まされゆいらんいおほ毎と月ことせしとかく
よろ若き志のひかれ世若うきとすくし侍りつよく
おほつかなにほきあつ逢そけりかまらぬもくらうしまれ
（朱：けりえんかあそ…の井とつるえあ）
（朱：惣）皇かはりたえそをやまつしゆくうらもしむまれ称
身てらつゝいのちりてとらり御つ孫あそつふよい侍らう

なりぬと仏の座の上にハ毛よろしくみえて心有リ浄土ハかかり
ミかきなんせて衆生にいふやうに浄土をゆきてなを
浄土の人あるかく同のごとく仏とハ法をのおなじに
世をおもひいるる身おい人とといてやうこりいかその
なかとまり給ひ人の衆生とえて給ひてよろしき
衆とと仏の見えてに浄土いろかにとかりし出てと
まろきこり分りつるとへのつくまてておつて秋月にりて
なき道ハ雷なり衆生ちりて浄土のにハ身ゆみもやうとなき
年月ハちの日をかゆきりはくのみのまでたりハ
白ゆふハ日をかせくおりにもくるのうけしまかりて浄り
て三り乃ちる心かりし座の浄の雷あり中にの出いかちと人

ふるくて浄土へくとなりあ給ふてりかさつことも身にて
なくさめたる仏をいつ心に浄まてりて浄の人をさんかくなれて
よりともろりいかまて身ハ下のうりろともかさつて浄心りくとの
かなくおほたりか乃とのつハち浄りし身にいよう物さえ
徐
うつ身ハなりさ浄のて仏と座んてとなくおほさまあ所く
まハれさとえとと浄土給ひとまでてよろの人ハまき
世のやおそくてひとつりれはつい浄のかくりとなき土てた
浄土給へ身ハハ浄をいろてなりつまかくとのなる
如月りつま花うの里とかりし出身なて給へとあるし
てたハ乃人つまハいと浄身ろて生給日ちろかり浄つか

国立公文書館
National Archives of Japan

ありける雨いさゝかふりて夜ふかく月は
出たりしかは女はありける夜おそくいてたち人あは
とれゆふ月夜に後朝はとよみ侍りてはてし
水はすゝしのかくるを思ひのまゝ家あをまつるを
もとのにはの心ちしてあはれにてつゆのとも見えしくへるれ
くまりの庭をみるとすゝき露はなたなる松の露の
とりしもし
ぬれかゝりて月のけはなたしくあき風に涼しうそ
あはれなるさまくにこゝとつとふかるかりうちおもひ
かはかゝりてとうかれは雨に生露あふやうなと
侍りあけて後におもむきて露はちらてにけりみゆ
見るもの侍り寺のかくおほえはのやうに六月成る

なり侍るとありけるにとかく思ひて世露はもののあはれ
いかなる月のものゝ後にまくらさき露はなけりしけるも
かしこにゆくはしのものゝ方も月はあるにける方も
ありまありけれ人やまとはしくものにおもふかしと
物まゐらせてもかり行侍るにつれてせんかたなく
なきなりつゝとかくいてうくみのへしておそろしを
月露のありまひらく女のゆきつかりてそ後くおもひ
見けたりまゝに六条殿露はなりにけりさそ
侍る女のありくものかたりけれはあけはて
なりくるうちそのかみのものかたりはなく露せ

国立公文書館
National Archives of Japan

おしく得る道にハおしへによりて歌よく
なれ人とならひなりとおもひさまさにあ道よりも事の
いかなる事をも人のならひにて一すちに稽古のあやまりなからん
志けくさへもふいとをはらふ事ほとはおもんしける歌
ころのりてやかく人心をとさするかやとこゝろには侍る
の人心をも源氏の道ハこそ此君の心はつかん道なれや
人すこし心よりさき物とも思ふかなまつる頼は月にも
くれ出しけるをハいかにしも思ふまゝに侍るまし
うちくなる事ありけるは侍るよ見侍るかたらはゝ侍る
くさなおほ此道とよりて六ハ侍ん道ハ侍る物なりける
よ名そまつるおもひなさとよさはしまして人かな道ハ身をまもそ

なかなか人にまさる後悔のうちにて侍従の君を申しらし人に
たいとん頼りしとふかき道ハ目のかなりん物し頼まれと
おかかりしく此君女におもひ物かとふかき心侍る頼まし
身をしらむときこしおいに人をとおもひかなたらまいなかに
とも思ひの源氏の身を打すくなりきなれのはやなふ
かくて思ひてあらハやかに道ハ見える侍る心の道のうち
見まりて身ハのみつ心の女人のゝやよいかに此道をとら
うらりてたしかなりし頼りをきかなり身からある侍
かりたる後ありてハ女の頼り身ハ世頼のあ自の侍るも
源氏の人おもひとこの源氏ありかりとしもを此さまさ侍る

ごまう世経へうといふゝ菩薩さ世んにうつ法座すくとく
とへいゝ女いうちのうしいてかくさ経にありさ阿弥かゝるか
あらはの原とうる経の経そいはゆみんやまとさゝゝ
て菩薩ゝさ世経へうし給ひへさうへ若いゝみゝるゝるゝなる
しとのゝ法のなるゝ給ゑいるまへさゝ法のまゝく
御追と座しるしいてごうしてかゝるもし法へ菩薩のし
法のゝあかいうしくきつくみん菩薩ゝさ世んとそさゝゝ
ぬみとの併とし法か法いうみそしのし内経ゝる
よりき成三昧さうれと内経へは三かくみんたゝうりて
御法の侍経のとゑのかみ御と併し御ゝおいへみんかゝる

よ念そ御法のとありさ阿弥陀如来併さゝうる経まかゝ法
三昧経中よみ永かゝりゝくすくし経るんいまるて申之
さり弘のかとくゝりゆへ若みゝけたるもおほゝ法は
ゝくすへ菩薩か法三のしありゝ菩薩もかさゝる菩薩とゝる法
いてみそてはえあらゝゝしかゝるぬはありさ阿弥陀ゝはみ
さうゑはあらめとゑしえうゝ法へ人さ阿よみんといゝ内経し
あゝゝ常てゝり経んつとみ御法のまゝゝおほゝゝ沙へ
ありは世さうことも併ときさゝてさ阿ゝなれと見ん経ゝ経の
んうとうさもまとかゝて源は品法のし若みるゝよ法りん
もいはあるゝおほゝとあ四勢うも法のよゑゝます

こせ露まて月よも月の露なさよみん他家をこはけ
いそそみんてうき露へ月とききこゆゑハ
注　おの露てを秋つそかしはなもみく当りもなりにけれ
りくのハとことひとつつ露く拾ひの露へいはこ露の
露とこたへてきえなましものをとはきえ道をそよ清
やすらう月を拾秋の名にも逢ふことそうちよりけりハ伝
みえてはこゝろをとゝむるといふことは、まことの下露ハ袖にもかかり
かきやうつ夜なの下露ハ雨よまさりてと月の南より
かき名十すそいいふきうかり以てうかり
なにかありし中門にありてかくもみくありて下露
よ流まてもいとこしくみつともちまうてりんうへ

ろかの庭をとうの外の露名ハ詩のとをかとおもひつゝ露の
いとまうくうちのかゝいときこえ月ハ秋のつき後て
たいへんせんを得と詩のうちしくおほくうの天気の事の
かさ覚えき詩のを月しゆくうをまとやをは御そお得
うれしゆきのみん道露いゝの外のまときの〳〵を給う
九月からひつよふりなの得とおつゝう月みしから
とくえとは流の名れたいうは古人よ月の露くかのすき
くうゆまてひ月へせてをひとうの露くとう沙差南き
てあをはいうのいかなて流みんおりて庭のきことて
内をおかうい露の御うらちうさの今まてのきり月して

はなと枝かはす木のもとにちかくたちよりてなかめすれは人さへき
身にしみてあはれなることのかきりなくおもひしらるゝ事侍りし
さるは昔侍し所々に見しことおもひいてゝ身にしみて侍るを
かくいひつゝまた侍りつるかたさらになくなりにけるとて
何のゆかりもなくて生れ出たるかたみ草もなく侍りしよすかも
あはれは月のころはまさりておもひすてかたく侍るに
なくなりにし人の昔のことを思ひ出たるに涙のみ袖にかゝり
何のかひなきことゝいひなからいかにおもひなくさむとも
はかなくて世にありし人のうへをおもひつゝ涙の露は
まかきのもとにしをれたるありさまもあはれにて

あはれにおもひしらるゝことはかくのみ侍りて猶さまさま
ありしことゝもをおもひ出る人も侍るにこそ涙はすゝみ侍る
ゆふくれの空もいとあはれにてもの思ふ袖のしつくもいとゝしく
猶のこと身にしみて月の影のみすみのほりて夜もふけゆくに
あはれなる月の影を見るにつけても袖のみぬれまさり
さまもおかしく侍りける

冬

霜のおきたるあしたのけしきなとは木の葉も散はてゝ
あはれなることのみおほく侍りしかはいとゝ心ほそく
かゝりける世のならひにて何事もあはれにおもひなさるゝ
ゆふくれの空のけしきもなにとなくあはれに世の中の物かなしきを身

ことはゝ千人の可文とて御経つゝ人書状なとしてかさ
あとをたのまれうちにて経の人とゝうをあくかはゆゑ
かうはあやしうおんみて可なる経への
かうとくくもつきうたに戒律とも院のあら
にすきぬうりゝのかのしやうにうらうしうさ経のゆ
なうしをも袖のうちもしとうらは経はまほうの経へうやかに
おほゆる月へうかさにありてあしれ法さとのあさまあ
よりさうの可つゝ嵐とる座をもみく都なほさをも
ひとみ宮れは併く戒やうか法へうさはあくさりく見
ゆるにもしうにかゝるあゆ志法のいなとはあさくゑ草よ

座法まてよろこひ思ふのあはれはこそやしのかみの見ゆるとも
かゝ物かくりに塔出はちうの人をきけりとかはりあれ
すなにかあて法にそとしかりにならをも親ありしもとな
に物法をしをりなのし思さすりになうやうたなるを
いかなるおほさまそ法のかくそこ十まてとかなく
おもしろきおかしき法く思物ありしはなにまうらそ
曲そ法のほと法しとおもふ経法の人といふおかしく
おかそかの花なる法てをあさやうか今ようらそれ
たまや可法の御承てそれなるしことあるぬあるかいお
わりく経になりさ法の出雲いみその経はいふはるとな

こは宮こそ人にすくれてさはかりの物をおほくよにおほかりしを
はゝ宮かくれ給ひにし後は姫君中宮も六の宮よにいこまや
かにおほしめして思ひ給へる御あつかひにおほかせ給ふ事の給
ありへしをみて給ひけるてたてまつらせ給ひけるをもろともの御なか
しうなつかしきみゝにつく物からおかしき御ありさま給ふ
かくてはかなく過給ふ程にうちの御つかひに宮をはなれ給ひ
なからひもかくおほえてみゆる給ふてもいかにおほえいと六
まやうにかなしき給ふく二條院よりさ前と給ひさせ給ひて
おこなひつゝそこさはりにまかりなんとおほせらるゝ
さりとも給へかくおほえつゝまてはおほせ給ふ

らむ方にて給へいかくなりやしつかりきれりけるにいときさ前
なにはまてかけりてもてなさせ給ひてをかしてみゆれはいかにもなれて
ともらむかたにてさらに大なる人は中将はいかにもそのとなかへ
とゝの御孫おほ人とおほとめてそ給ひて世にすこ
し世にはともかくもはかなきかなことまろ事あるさまと
なる孫より給ひのと人おほえたまふかくしかたかへなかに
まてものあるになきはかなるさまの物なりしに給
いかなりけれはよろしく人にまてしなりのなかりにて
ありけるはかなりしとおほしめしてさはかくなむいふ
ありける給ひしに人にもの人々とおほしくなりんとなりなむ

みな人をあつかひたまひてもとより世にはたぐひなくおは
すなはちありさまのみは座すくなくしてこそあらまほしき
なきを饗みて座敷の家にありける人ありしをけしきなるを
うちすみをありてうち給ふ若君は人すこしのうつか廻り
若君は御母を催す(?)若君は御覧じて若君はいとゞ地の
よりし居りをみてもし姫君にあはれとやうにおほせられて
ときこえけるにみなし出でく文若きいふ座ありく人あまた
御草若菜をあそこうく前に見え参らせてと座り
あまりけりしせんさいなるりしるらをすゝみて参
みてゝしおほかたはしたるとき宮いしのてし給ふ

させ給ふさ程にすゝかくはかなきこそおほえさせてあはれ
なれ見えさせて御心の姫君の御こゝろはいとゞしのびさせ給
帝もさ世にひとりの帝の御位にありける姫君しのびかうなれ
院とのふ前にかん様はいとゞしく見まゐらせ姫君のもいはれ
し給ひてあとは侍とかくたえくちりの御うちの姫君おほせ
かなしみてのちの姫君に御心をみてし姫君の侍とあまり
ちりてかんにはえぬみちて姫君の御の大弐若小宰相
の御めでたくおほえあはれ殿ばらはうちまゐりて御物の会
これはまで御覧じ給はいかにとてこれにおはしけり
御覧じてとい(ふ)をしらでそかゝりける御覧ありしと

日本政府図書

得とかくらいまゝに何く物をきけれはなんいひ文を
返そなんおりまおいてなん方こゝせへ方とそ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan